研究課題	『十巻章』内の諸著作の再考察、 及びそれに相対する末釈類の整理と考察
研究代表者	弧　島　玄　明（仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻）

①　研究の目的

本研究は、真言宗における重要典籍である『即身成仏義』一巻、『声字実相義』一巻、『吽字義』一巻、『弁顕密二教論』二巻、『秘蔵宝鑰』三巻、『般若心経秘鍵』一巻、『菩提心論』一巻の七部十巻を集成した『十巻章』について、それぞれの注釈書を用いて総合的に整理、考察を行うことを目的として行われた。

『十巻章』の研究については、総合的には、昭和五十九年に小田慈舟師により著された『十巻章講説』がある。しかしこの『十巻章講説』以外では、『十巻章』の総合的な研究は少ない。また、各『十巻章』諸著作の研究についても、それぞれの注釈書類の研究は諸先生方によって行われているものの、注釈書類を総合的に用いた研究があまりなされていないとされる。

そのため本研究では、『十巻章』各著作と、それぞれに対応した注釈書類をデータベース化し、考察を行うに足るデジタルデータベースの構築を第一目的として、またそのデータベースを用いた『十巻章』諸著作の総合的な研究を第二目的として研究を行った。

平成二十三年度は、昨年度に引き続き『秘蔵宝鑰』と『秘蔵宝鑰』を中心とした注釈書類の研究、調査を中心に行った。

特に本年度は、主に今まで収集した資料の整理、データベース化に向けての作業を中心に本研究を行った。

②　研究の経過

本研究では、一・『十巻章』各注釈書の読解及び考察　二・『十巻章』同一著作の各注釈書同士の思想の同異の比較、考察　三・『十巻章』同一著作の各注釈書の時代ごとの思想の変遷についての研究　四・注釈書の考察を通して、『十巻章』諸著作の総合的な考察　の、四点を成果として期待し、研究を行った。

研究の方法としては、『十巻章』諸著作について、一つ一つ先行研究を基に再考察を行うと同時に、『十巻章』の一つの著作に対して複数の注釈書を用いて、『十巻章』著作の内容の再整理、考察を行った。

具体的には、前述の『十巻章講説』や、加藤精一「〈秘蔵宝鑰〉と〈秘密曼荼羅十住心論〉の関係について」などの先行研究を、共同研究者、研究協力者とともに読解し、それらの先行研究を基に『十巻章』内『秘蔵宝鑰』の再考察を行った。また『真言宗全書』及び『続真言宗全書』などから『秘蔵宝鑰』に関する注釈書を抜き出し、データベース化を行いつつ内容の比較、考察を行った。

本年度の本研究における研究経過は以下の通りである。

・二〇一一年四月…東日本大震災による登校制限のため、昨年度より引き継いだ研究協力者については、各自担当の資料の具体的な精査とデータベース化に向けた作業を、各自自宅にて行わせた。

・二〇一一年五月～二〇一二年三月…月二回程度の頻度で研究会を行った。その際には、昨年度から引き継いだ班分けを用い、班ごとに先行研究の調査、担当注釈書の研究を発表させた。

・二〇一二年二月二十二日～二十三日…高野山大学付属図書館にて、『即身成仏義』、『秘蔵宝鑰』、『菩提心論』についての、未調査の注釈書類の聖教調査を行った。なお、ここでは図書カードの製作及び調査対象の裏書等の具体的な調査を行わせた。

また、デジタルデータベース化作業としては班ごとに作業を任せて行わせた。以下に作業手順等を記す。

底本としては、『弘法大師著作全集』、『弘法大師全集』、『大正新修大蔵経』、『真言宗全書』、『続真言宗全書』を用いた。

各注釈書のデータベース化作業については、マイクロソフトのワードを用い、底本を忠実に打ち込む。具体的には、文字数、行数、旧字新字等の漢字、梵字については極力その内容通りに打ち込み、例外は『今昔文字鏡』に無い文字のみ認めた。

返り点については「下付き」機能を、仮名については「上付き」機能を用いて行う。特別な読み方をさせている送りがなや対校本等の特記がある場合には、文末注として処理する。

底本に組み文字として書かれているものについては、フォントサイズを下げ、網掛けを着けて処理する。ワード内にある「組み文字」機能は用いない。

基本的には、上記のルールのもと研究分担者、研究協力者に打ち込み作業を任せた。

また、「々」については「〃」に統一し、仮名として書かれている漢字「兎（して）」「添（こと）」等の記号はカタカナにし、「玉フ」等、漢字でも判別のつく仮名についてはそのまま入力する。それ以外の仮名については原文をそのまま打ち込むこととし、濁点が必要な場合でも底本に濁点表記がなければ清音で入力するとした。

③　研究の成果

本項目では特に、聖教調査の結果について、及びデータベース化作業における調査について記す。

まず、高野山大学付属図書館における聖教調査についてである。

聖教調査の方法としては、『国書総目録』等による写本類の調査を行い、現在閲覧可能な図書館へのアプローチを行った。本年度の調査対象については、その全てが高野山大学付属図書館に所蔵されていることが判明したため、高野山大学にて二日間にわたって調査を実施した。

今回の調査で収集した古書データは、七十五冊分であり、そのほとんどは十六世紀後半から十七世紀前半に書かれたものがほとんどであった。この中で、今後の研究に活用できる古写本等について、以下に記す。

・『即身成仏顕得鈔』三冊
・『即身義問題』二冊
・『明範御口　即身義補闕抄問題』一冊
・『即身義論議』十五冊
・『即身成仏義打集』九冊
・『即身成仏義』四十四冊

これらの文献については、現在刊行されている注釈書類と、書名は同じものの内容に差異がみられることや、江戸期の写本ではあるが現在未調査の鎌倉期の書物の写本であること、また分量が多く、今後の研究に際し必要と判断したものである。

なお、これら古写本の図書データについては、今まで行ってきた聖教調査の図書データと合わせ、『十巻章』における注釈書類の古写本、古刊本データとしてデータベース化を行っている。

以上が、高野山大学で行った聖教調査である。

これらの聖教調査により、研究分担者及び研究協力者の各自の研究がより幅広く行うことができた。以下にその理由を示す。

○研究分担者、及び研究協力者それぞれが、古写本等の聖教に興味を持ち、実際に自身の研究分野の聖教の調査を行っており、協力者自身が調査申請を行うなどの聖教調査、写本研究を積極的に行い、各自の研究に役立てている。

○聖教に直に触れるに当たり、古書類の取り扱い方や図書カードの記入法などの基本的な注意から、聖教の年代、紙質、筆跡、読み方などについて、諸先生に教授して頂いた。そのため、このことは研究に携わった学生全員が、個人の研究に応用できる知識、技術を得られたと思うので、大いに感謝している。

○協力者の中には、多々ある辞書の用い方、調査方法などや、諸寺院・諸研究機関に送付する申請書の書式がわからない者もいたが、共同研究に重ねて出席していくなかで、このような知識や技術を少しずつ習得した。この研究を通じて、こうした知識や技術が、研究分担者、及び研究協力者のそれぞれの研究の幅をひろげられたと考えられる。

以上が、聖教調査の成果である。

次にデータベース化作業における調査である。

研究会では『仏教体系』をモデルとしたデータベースの構築を目標としてデータベース化作業を進めている。そのための方法としては、まず打ち込みデータの精査、そしてデータベースを構築する為の内容分析を第一段階として行い、第二段階として注釈書の内容ごとに細分化し、内容の比較ができる状態にすることを目標にしている。

その際にデータベース化する書物の内容を精査し、研究する必要があるが、本年は今までに調査を行った『即身成仏義』、『菩提心論』、『秘蔵宝鑰』の諸注釈書について今まで行ってきた調査をまとめた。

具体的には、データベース化を行うために必要な内容ごとの分類及び整理、また、マイクロソフトワードで打ち込んだ『十巻章』及び注釈書類のデータを、ハイパーリンクをつなぐための、各注釈書類の内容ごとの分類作業である。

これらの作業により、ある程度の資料についてはデータベース化がおおむね完了したが、全ての注釈書類のデータベース化作業、及び前述の聖教調査時の古写本・古刊本データベースとのリンクについてはまだ完全とは言えない状況である。

④　研究の課題と発展

本研究は、二〇〇八年度には『即身成仏義』の、二〇〇九年度には『菩提心論』の、二〇一〇年度、二〇一一年度には『秘蔵宝鑰』の諸注釈書類をデータベース化作業及び考察の対象として研究を行った。

しかし、完全なデジタルデータベースを作成するには至らず、いくつかの問題点も浮き彫りになった。

本研究の課題として、『十巻章』諸著作の内容の研究と、データベース化作業がバランスよく行えなかったため、今後の活動に若干の遅れが出てしまった状態を改善することである。なお、調査・研究自体が正確にまとめられていないことも今後早急に解決する課題である。

一方、『十巻章』諸著作、及び各注釈書のデジタルデータベースの構築により、『十巻章』の総合的な調査と個々の内容の部分的調査の両面が行えることになるだろう。具体的には、注釈書類同士の内容比較や、引用経典の引用部分に関する考察、『十巻章』の他著作の注釈書との比較による著者に関する調査、年代の違う注釈書を比較することでの時代ごとの『十巻章』のとらえ方の研究などが行える。

また、各寺院、諸研究機関との、古写本に関するつながりから、未調査の注釈書類についても、今後調査を行えると考えられる。

今後も、『十巻章』諸著作とその注釈書類のデジタルデータベース化、及び考察、研究を続ける予定である。